

幕末・維新时期における『海国図志』の受容

——佐久間象山を中心として——

源 了 圓

①

中国の湖北大学教授馮天瑜氏は次のように語っている。「中国における近代新学の発生・成長は、無論、西洋の学問の刺戟と影響によるが、それは結局のところ西洋の学問が簡単に転移したのではなく、中国人が近代中国という環境の中で創造した精神的産物であり、中国の伝統文化と西洋の学問が衝突し合いながら、互いに溶け合った所産である。このような相互作用の複雑な過程において、道・咸年間の経世実学は、接木の台木のような働きをした。いわば道・咸年間の経世実学は中国の『古学』が『新学』に通ずる媒介と橋渡しである」。

ここで馮教授の語っていることは、日本の幕末・維新时期の実学にもそのままあてはまる。日中両国はともに「内憂外患」に見舞わ

れ、両国の政治家や知識人たちは必死になって彼らの直面する問題に立ち向い、それぞれの国の独立を全うするために全力をふるった。そのための彼らの思惟と行動の軌跡が、中国では道・咸年間の経世実学であり、日本では幕末・維新时期の実学である。

当時の中国が清朝中期からの急速な人口増加による経済的窮乏と社会的不安に喘いでいたとすれば、幕末の日本は幕府の創業以来の自然経済と商品経済の矛盾が収拾できないところまで来て、慢性的インフレの中で武士と農民が最も苦しみ、百姓一揆が頻発していた。社会の体制と現実とのくい違いを人々は感ぜざるを得なかった。そこに両国とも西洋による外圧を受けたのである。

ところで相似た状況にあった両者を思想的につないだ著作があった。魏源（一七九四—一八五七）の『海国図志』がそれである。この本は、アヘン戦争に林則徐（一七八五—一八五〇）の盟友として戦つ

た一人の知識人が、敗戦の苦渋を糧として中国の進むべき道を示した本として、また当時の日本が最も欲していた世界の事情についての情報を満載した本として、当時の日本人に熱狂的に受け容れられた。幕末の日本にこの本ほど影響を与えた中国の本はないであろう。もちろんその影響は古典のような永続性をもつものではなかったが、日本がそれまで模範国と仰いだ中国の、アヘン戦争における敗北という衝撃的事件の中で取るべき進路に迷っていた時、この本は読者にその人なりの仕方できかに西欧の衝迫インパクトに対応するかという切実な問題への解答の示唆を与えた。幕末の日本にとってはまことに時宜を得た本であった。

私はここで「その人なりの仕方で」と言ったが、この本の影響は次の三つのタイプに類型化できる。第一の最大なるものは、「夷の長技を師として夷を制する」という魏源の考えに触発されて、西欧の科学技術文明を採用して、そのことによって日本の独立を全うしようというものである。このタイプに属する人が圧倒的に多かったと思われるが、その代表的人物には島津斉彬、川路聖謨、佐久間象山、その門弟の吉田松陰、若き日の西村茂樹らがいる。第二にこれに反して、この本を読むことを通じて自分の攘夷の信念をますます鞏固するとともに、この本から西欧のインパクトに抵抗する道を学んだ人々であり、破邪論で有名な幕末の儒者安井息軒、攘夷派の志士頼三樹三郎などがそうである。このグループはそう大きいとは

言えない。そして第三は、この本を通じて攘夷論から開国論に転ずるとともに、さらに積極的な交易論をとった人々である。彼らは第一のグループのように科学技術を学んで強国日本になることだけに満足せず、西洋の諸般の事情を知り、西欧の政治、法律、経済、社会のしくみ、福利厚生のあるり方等についても大いに学ぶところありと考へ、場合によってはキリスト教に対しても関心をもった人々である。彼らは日本のあり方の変革さえ志向し始めた。開明的志士の橋本左内がそうであり、横井小楠もまたそうであった。彼らは西洋の軍事技術だけでなく「夷情」についても関心をもち、「以テ夷ヲ款スル夷ヲ」^{スル}とくろまで踏みこんだ（『籌海篇』第四議款）魏源に対して関心をもった。

右の三者のうち、歴史的に最も重要なのは第一と第三のタイプであり、中国思想史のカテゴリーに従って前者を「洋務派」、後者を「変法派」と呼ぶことが出来よう。同じく開国論者であり、同じく『海国図志』を読みながらこのような反応の出たのは、魏源の思想それ自体に洋務派的面と変法的な面があることを物語っているが、他方、『海国図志』の読み手の内面の志向性が魏源のそれ(2)ぞれの面に共鳴し、選択的な呼応をしたということを閑却してはならないと思う。紙幅に制限のある本稿では、洋務派の佐久間象山だけを選び、彼の魏源への共鳴の内容を示し、その共鳴を起させた彼の思想の志向するところを明らかに示し、そのことを通じて幕末日

本の思想的可能性とその特色を描きたいと思う。

②

この節では『海国図志』の成立についてしるしたいが、その前にこの本の著者魏源について一般的なことを紹介しておく。魏源は清末の官僚でしかも思想家。官僚としては揚州広東台県の知県として水利事業や塩政に関して大きな貢献を示したが、アヘン戦争当時は欽差大臣林則徐を扶けて英軍に抵抗する知的指導者の役割を果たす。

彼の学問的立場は公羊学であり、そこから改革の理論的根拠を得たとされる。とくに彼が共感したのは董仲舒の『春秋繁露』の「微言大義」で、「道」と「勢」との関係に注目した。道だけでなくそれとの関係で勢を重んずる彼の思想は、この世を一大変局とみなし、そこに身を投じて現実を変革する生き方を選ばせ、政治変革の主体たるべき官僚の腐敗を除去するために官僚制・科挙制の改革を説き、地方民利の増進のために水利事業・漕運・塩政等の改革に向わせる。そしてアヘンの密輸に対しては断固たる処置を取るべきことを提言してやまなかった。⁽³⁾

アヘン戦争の終熄した道光二十二年（一八四二）、魏源は二つの本を書いた。一つは『聖武記』全十四巻ならびに『海国図志』全五十巻（李朝朝鮮にはほどなく受容されたが、わが国にはこの五十巻本は輸入されていない）である。前者は清王朝創業以来の武功を主と

して記述した本で、アヘン戦争による敗北ということで国民が自信を喪っている中で、ナショナル・アイデンティティを回復するために書いたものである。そのうち巻十一以降は「武事余記」となっており、「兵制兵餉」（巻十二）、「掌故考証」（巻十二）、「事功雜述」（巻十三）、「議武五篇」（巻十四）という構成から成り立っている。わが国ではこの四巻がとくに注目され、『聖武記附録』と題して翻刻され、吉田松陰などはこの翻刻本の方を読んだようである（翻刻者不明）。⁽⁴⁾

『海国図志』の方はヒュー・マレーの大著『地理全書』（Hugh Murray, An Encyclopaedia of Comprising a Complete Description of the Earth, Physical, Statistical, and Political. London, 1834. 3 Vols.）を、広東在任中の林則徐が、袁德輝等に命じて翻訳させ、『四洲志』と名づけた本を藍本として著わされたものである。『四洲志』（道光十八年・一八三八年刊）の原本は一千五百頁を超す大冊ということであるが、漢訳はその要点を拾って、全体の二十分の一位の分量に要約したものであった。⁽⁵⁾ この本を林則徐の依頼によって魏源がさらに増補して道光二十二年に『海国図志』全五十巻として刊行したものである。その後魏源は道光二十七年（一八四七）に増補改訂して六十巻のものとして揚州で刊行した。われわれが今日容易に入手できる台湾の成文出版社から中華民国五十六年に翻刻された『海国図志』はこの版に拠っている。魏源はその後もさらに改訂

増補の作業をつづけ、咸豊二年（一八五二）に百巻本を出し、これを定本とした。この際、ポルトガル人瑪吉士の『地理備要』ならびにブリッジメンの『合省図志』によって増補したとされている。

この本は基本的には「万国地理書」であるけれども、巻頭（六十巻本では巻一、百巻本では巻一、巻二）に「籌海篇」を置き、議守、議戦、議款という防禦・戦闘・外交という西洋のインパクトへの対応についての魏源の考え方の基本的骨組をしるしている。そしてそれらにつづく巻で各国の地理について記述する時はいわゆる地理だけでなく、その国の人文・社会に互る世界の国々の「事情」をしるす。この本の末尾の部分には造船、鑄砲、測量、砲台のつくり方、火薬の製法、その他の西洋の器芸（機器についての技術）等についても説いて当時の社会的要求に応ずる情報が提供されていた。

この本の基本的考えは「夷の長技を師として夷を制する」ということであるが、ここで言う長技とは「戦艦」「火器」および「養兵・練兵」の三者である。しかし彼の関心は狭義の軍事的技術にとどまらず、彼は通商の必要を説くとともに、より広い戦略的観点から西洋の事情を知る必要を説き、その具体的方法として「訳館を立てて夷書を翻訳」すべきことも説いている。ここに見られるように西欧の科学技術文明の積極的な受容や、外国の事情を知るための措置が講ぜられている。それだけでなく国内問題としては人心を正し、人材を挙げることの必要が説かれている。この本に説かれているこ

とは、一つ一つの精密さについてはまだ欠けるところがあるが、その包括的・総合的見方は政策立案者としての魏源の卓越性を示すものであろう。

この本はこれまでみずからの文明の輝かしい伝統に自足して「中華主義」に立っていた中国においては画期的な本であった。しかしながら中国では最初の間は正当に評価されなかった。郭崇燾の「書海国図志後」によれば、「要するに『海国図志』の大意は、形勢を考え洋情に通じ、敵に対して勝を制するために役立てようとするにある。それは互市・議款及び夷人の長技を師として夷を制すること⁽⁵⁾を論じたもので、これを通商開始の日に説いて、笑いかつ駭かぬものはなかった」とされ、そしてこの言の正しいことは、十余年をへてはじめて実証された、と説かれている。すなわち「太平天国の乱」（一八五二―一八六四）や「アロー号事件」（一八五六）を契機として、はじめて気づかれたというのである。アロー号事件のおこったのは、わが国の安政三年、太平天国の終つたのは元治元年⁽⁶⁾であったことを思えば、その間中国は中華中心主義の厳しい代償を支払ったと言わねばならない。

3

では日本では魏源の『聖武記』やとくに『海国図志』はどのような受容されたのであろうか。魏源受容についての基本的文献が二つ

ある。その一つは大庭脩教授の『江戸時代唐船持渡書の研究』（関西大学東西学術研究所研究業刊一）であり、もう一つは開国百年記念文化事業会編になる『^{（7）}時代日本人の海外知識』（元版乾元社、現在原書房）である（実際の担当者は鮎澤信太郎・大久保利謙両氏）。

前者によれば、『聖武記』は出版後二年たった弘化元年（一八四四）にまず一部一セットだけ渡来し、元代二十五匁で老中阿部伊勢守の手に入っている。翌年一部二套が輸入され、同じく老中であった牧野備前守が入手している。さらに翌弘化三年に二部輸入され、老中青山下野守、戸田山城守の手に入っている。時の老中全部がこの書を手にしたのであるから、当時の日本の政治家たちはなかなか勉強家であったと言わねばならない。その後も毎年のように輸入されているが、嘉永三年四月に尾張の鷲津監（毅堂）——永井荷風の外祖父——の校になる『聖武記採要』三冊が出版され、『聖武記』巻十四の「武事余記」講武五篇が城守篇、水守篇（上巻）、防苗篇、軍政篇（中巻）、軍儲篇（下巻）として刻されている^{（7）}。そして、さきに表示したように『聖武記附録』四巻四冊（巻十一—十四）も翻刻されている。この翻刻の出版は、もともと同年に刊行された『海国図志』の翻刻出版よりも四年早い。

この『聖武記』は前記四人の老中のほかに、嘉永二年の老中久世大和守や遠藤但馬守、本庄安芸守、酒井右京亮等の政治家の手にはいり、佐藤一斎、佐久間象山なども読んでいることが明らかであり、

指導者階級の人々によく読まれていたことがわかるが、その浸透度や影響は『海国図志』にはるかに及ばなかった。その理由は『聖武記』の大半は清朝皇帝の創業以来の武功史で日本人にはあまり関心もてなかったこと、巻十一—十四の末尾の諸巻は日本人にも関心ももて、その翻刻版が出たほどであるが、その視野は軍事的問題に限られて、『海国図志』のような西欧諸国の人文、社会の現象に及ぶ視野のひろさがないために、人々を魅きつける力においては『海国図志』に較べると乏しかったのであろう。

ではなぜ日本での『海国図志』の受容は『聖武記』に較べて遅かったのであろうか。それは『海国図志』に載せるところの西洋事情が国禁のキリスト教に関する記事を多く含むため、その輸入に抵抗があったからである。

以下まず『海国図志』輸入の次第を『唐船持渡書の研究』に従って見てみよう。この書が初めてわが国に伝えられたのは嘉永四年（一八五二）の中国渡来船「亥二番船」を通じてであった。この時は三部、一部の元代は一三〇目である。嘉永五年の書籍元帳では「此桁（項目の意）御禁制之文句有之ニ付向井外記与御役所江相伺処、不残差出様御沙汰ニ付相納旨、子十一月十八日同人与懸合越。手紙者一件帳ニ帳付在之」^{（8）}（傍点ならびに句読点は筆者がつけた）とあって、三部の本はみな奉行所に納められ、さらに奉行所を通じて、御文庫用、学問所御用、老中牧野備前守忠雅の三ヶ所に各一部ずつ

納められた。これらの本がどのように利用されたかよくわからない。ついで嘉永五年入港の「子二番船」で一部もたらされたが、これは長崎会所に保管された。その二年後の嘉永七年の九月の「寅一番船」の書籍元帳では、荷主陶梅の分の十二部のうち「内七部除、残五部」であり、この五部と荷主姚洪の分の三部の計八部が競売に附せられることになった。除かれた七部は幕府御用となったのである。この時初めて『海国図志』は日本人の知的共有財産となつて、原著ならびにやがて出るその翻刻が幕末の日本をゆり動かし、鎖国日本を開国へと促していったのである。⁽⁹⁾

嘉永七年に輸入が許されたのは、ペリー提督の来朝によつて同年三月に日米和親条約が締結されたことと深い関係がある。なお百巻本は、前記のように一八五二年に刊行されたが、一八五四年（嘉永七年・十一月二十七日から安政元年）に舶載されている。当時の人々の読んだものが中国版であつた場合、六十巻本であつたか百巻本であつたかの判定は、それらのほとんどすべてが今日伝わっていないので、なかなか困難である。ただ吉田松陰の読んだものは、彼が「この書が出版されたのは道光二十七年」と書いているので、彼が読んだものは六十巻本であろう。⁽¹⁰⁾

わが国の『海国図志』の受容における一つの特徴は、直ちに多くの翻刻版が出たことである。『時評日本人の海外知識』によると、わが国で翻刻されたものは二十三種もある。これを発行年にしたがつ

てみると、嘉永七年15、安政二年5、安政三年2、明治三年1、となつており、嘉永七年（安政元年）から安政三年までの三年間に集中的に出版されている。

次に翻刻の形式を見ると、(1)塩谷宕陰・箕作阮甫の協力によつてなされたような原文の事実の誤りを正し（洋学者箕作阮甫の手になる。彼は歴史や地理の問題に深い関心をもっていた）、さらに原文の誤植を直し、その上で訓点を施した「校訂本」ともいうべきもの4、(2)たんなる訓点本3、(3)書下し文にした「和訳版」16、の割合になる。和訳版が十六も出ているというのはさすがに驚かざるを得ない。このことは漢文を読めない一般民衆も世界の情勢に熱い関心をもっていたことを物語る。この民衆の知的水準の高さと好奇心がその後の日本の発展の基盤となつたことを思わせる。

校訂版4種は、幕府の開明官僚川路聖謨が私費を投じて求めた『海国図志』を基にして、塩谷・箕作に命じて校訂させたものであり、当時の幕府の開明官僚の卓越性を物語る。また原文の事実の誤りを正すということは、わが国の洋学研究が人文・社会にまで及んでいたから初めて出来たことであるが、それとともに漢学者と洋学者との協力関係が容易に出来た当時の知的状況に注目したい。⁽¹¹⁾ この校訂版は中国の原版以上にすぐれた版であつた。

最後に、翻刻の対象となつた巻に注目したい。日本での翻刻は組織的・網羅的ではなかった。重要と思われるところに重点的に集中

している。その内容は「籌海篇」2、アメリカ篇9、ロシア篇2、イギリス篇3、プロシア篇1、フランス篇1、インド篇1、中国篇1、「夷情備采篇」2、「礮台・火薬・攻船水雷図説」に関するもの抄訳1、「国地総論篇」(六十巻本巻47・48)1である。これらの総計は24となつて、翻刻本の総数23とは合わないが、それは頼三樹三郎が「インド篇」と「夷情備采篇」とを合わせて、一つの巻として翻刻したからである。

識者への影響という観点から捉えたと、「籌海篇」における魏源の西欧のインパクトに対する対応の仕方についての考え方が最大のものであったが、一般民衆にとつては眼の前に見た黒船の印象は強烈で、米国とはどういう国かという関心がこれを機に勃然として起つて来たことが、翻刻がアメリカ中心であることからわかる。その後の日米関係の重要性に対する直観がこの翻刻の量にあらわれたのかも知れない。また箕作らが籌海篇のほかに米國・ロシア・プロシア・イギリスの四ヶ国を選んだのは、既述の国際関係についての見識を示している。さらにまた服部静遠の「礮台・火薬・攻船水雷図説」の巻のみを翻刻したのを見ると、『海国図志』を読んだ人々が、あながち開明論者たちだけではなかった、ということが推察できる。事実、翻刻者の一人頼三樹三郎(子春)は尊皇攘夷派の一人であった。開明論者から攘夷論者までを含めて多種多様の人々を、この翻刻の作業に引き入れたものは彼らに共通するナショナリズムの意識

であった。

5

多くの志士たちが魏源の『海国図志』を読んだ時、中国版で読んだのか、翻刻本で読んだのかその識別は難しいが、佐久間象山の場合は明らかに中国の元版で読んだことは、彼が翻刻版に含まれない魏源の統礮の説について、砲術の専門家の立場で厳しい批判を投げかけていることから明らかである。象山の場合には『海国図志』だけでなく、それに先んじて『聖武記』をも読んでいて、魏源については日本で最もよく識る者と言うべきであろう。象山の場合には魏源から影響を受けたというより、魏源の存在を知る前から魏源と同じ道を歩いていた同志とみなすべきであろう。彼はその著『省讐録』の中で次のように言っている。「予時事に感慨し、上書して策を陳べしは、実に天保壬寅十一月也。後清の魏源の『聖武記』を観るに、亦時事に感慨し之に著はす所なり。而して其の書の序は、又是の歳の七月に作られたれば、則ち予が上書に先だつこと僅かに四月なり。而して其の論ずる所、往往約せずして同じき者有り。あゝ、予と魏とは、各々異域に生れ姓名を相ひ識らずして、時に感じ言を著すは、同じくこの歳に在り。而してその見る所も、又闇合する者有るは、一に何の奇ぞや。真に海外の同志と謂ふべし」(原漢文、『象山全集』

卷一「省讐録」一二頁)

象山はアヘン戦争における中国の敗北によって衝撃を受けた日本の知識人の一人であった。天保十三年（一八四二）十月九日、上田藩の旧友加藤水谷宛への手紙では次のように語っている。「時に清国英吉利と戦争の様子は近頃御伝聞候や。……近來の風聞にては実に容易ならぬ事に被存候。事勢に依り候ては唐虞とら以来礼楽之区、欧邑洲の腥穢しんたいに交じ申されまじきとも申難き様子に聞え、扱々歎はしき義に有之候」〔象山全集〕巻三、二一五頁。これまで「模範国」と仰いだ中国のアヘン戦争における敗北による衝撃は、日本の知識人や政治家の方が、北京の中央政府の高官やその周辺の知識人たちに与えた衝撃以上に大きかったのではないかと思える。

象山はその年の秋、主君の真田幸貫が海防掛に就任するとともにその顧問となり、九月には西洋砲術家江川坦庵に入門している。それとともに意識革命をおこなって「談兵も講学家の一端にて、本より儒術中の事に御座候。迎むかも入て相となり出て将となるの規模無之候ては、正学も畢竟無用に属し申候」（同前、二二七頁）と言っている。それは彼がその約一年前自分の定めた私塾象山書院の「学約」に「凡そ此の中に在る者は、聖賢の学を以て志を為し、世俗の浮華の習を除去し、読書は務めて小学を以て先と為し、次に四書、次に五経、以て周程張邵朱諸子の書に及び、務めて序に従ひ精を致すに在り、鹵莽ろもう躐等するを得ず。非理無益の書は妄りに看るを許さず」（『象山全集』巻一、文稿一一四頁）としてきわめてオーソドックスな

教育理念の提起をしていたのとは大変な違いである。儒者は兵を談じないのが普通であるが、日本の場合は武士が儒学を学んだ場合が多かったので、儒者で兵を談じた人はたくさんいる。象山の場合さらに一步進んで兵を学びそして実践したのだ。このような象山だからこそ、アヘン戦争の渦中にあつたその経験から兵を談じている儒者魏源に、同志魏源として共感せざるを得なかつたと思われる。

象山は魏源が『聖武記』を書いた四ヶ月後、たまたま「海防八策」（天保十三年十月）を書き、「感応公（幸貫）に上りて天下当今の要務を陳ず」（同前十一月二十四日）という、彼がその後最も力を尽した国防についての基本的考えを闡明する上書を書いた。それは西洋のインパクトに対して日本はどう対応すべきか、という文明論的問題に対して、彼なりに真正面から答えようとする、儒者象山から思想家象山への転身であつた。その時期が魏源の『聖武記』の執筆とほぼ時を同じうするという感慨が、さきに引用した『省儉録』の一節にほかならない。

では西欧近代文明への対応者として、魏源と佐久間象山とはどのような共通性をもっているのか。異国に育ちながらある共通志向をもち、それがその時代の中では共に先駆的なもので、その点から言えば抵抗の多い生き方を余儀なくされるといふ類同性をもつが故に、象山の魏源への共感は起つた。その共通志向は何か？ それは周囲の人々が伝統文明に安住したり、ただ異質の文明への嫌悪感、恐怖

感、さらには拒絶反応を示している時に、積極的に異質文明の卓越性を認め、それを学び、そして受容しようとする態度をとり、しかもそれらを通じて異質文明の卓越性を自分のものとして、異質文明のインパクトに抵抗しようとする態度をとった点がそれである。

アーノルド・トインビーは古代イスラエルの宗教思想の用語を借りて、前者の典型を Zealots (狂信派) と呼び、後者の典型を Herodians (ヘロデ主義者) と言う。⁽¹²⁾ 彼の用語を借りれば、魏源も佐久間象山もともにヘロデ主義者であった。両者はいずれも深い儒教的教養をもっていた。しかしそれだけに安住して西欧文明を学ばなければ祖国は亡国の悲惨を味わうと考えていた。しかしだからといって二人とも完全に西欧主義者になる道は選ばなかった。伝統文明の基盤の上に西欧文明を受容することは可能であり、自己の帰属する文明のアイデンティティは充分に保てると考えていた。

時代との関係からいえば、彼らはともに西欧の科学技術、とくに軍事技術を学ぶことによって自国の独立は全うすることができると考えていた。しかしたんなる科学技術だけでなく、科学技術の成立する社会的文脈の下に問題を考える視座をもっていた点に、両者の先駆性がある。象山は『省營録』の中で次のように語っている。「その江都にあるの日に、はじめて魏氏の書を獲てこれを読みしに、また内地に学を設け、専ら夷書・夷史を訳し、敵情を瞭悉し、もつて駕馭に補せんと欲せり。これまたその見の予と相符するものな

り」(『象山全集』巻一、「省營録」一三頁)。象山が長崎のオランダ領事であったドゥーフ (Hendrik Doeff) が通詞十一人の協力を得て完成したいわゆる『道富ハルマ』の増補改訂版としての増補『和蘭語彙』の刊行に心血を注いだのは、彼が魏源のたんなる科学技術・軍事技術の受容にとどまらない見識に共感しこれを日本の幕末の社会に生かそうとしたためである。

ここに見られるように、魏源と象山は十九世紀の東アジアが西欧のインパクトに直面した時の代表的なヘロディアンであった。では象山はたんなる日本における魏源の祖述者にすぎなかったか？ そうではない。彼らは違ったコースをたどりながら、たまたま同じような考えに到達した「同志」であった。しかも象山には同じヘロディアンのタイプでありながら、魏源にないものがあり、魏源に共感するとともに魏源を批判した。そして魏源にない側面を発展させた。そしてこの両者の差異はたんに二人の間だけの問題にとどまらず、日中の近代化の差異ともなっている。

象山が魏源を批判しているのは、海防ならびに銃砲の技術に関する側面である。まず前者から検討してみよう。象山は言う、「魏は、上世より以来、中国に海防ありて海戦なしといひ、遂に壁を堅くし野を清くして、岸奸を杜絶するをもって、防海の家法となせり。予はすなはち盛んに礮・艦の術を講じて、邀撃の計をなし、駆逐防截してもつて賊の死命を制せんと欲す。これを異なれりとなすのみ」

(同上、「省僞録」一二頁)。

ここで象山が念頭に置いているのは、『海国図志』巻一の「籌海篇」上「議守」における魏源の防禦に関する議論である。ここで魏源は「外洋を守るは海口を守るに如かず。海口を守るは内河を守るに若かず」という立場に立って議論を展開している。彼は「敵を制する者は必ず敵に其の長ずる所を失はしむ」という見解をとっており、「夷艘」の長ずるものは「外洋」であり、「内河」は中国の長ずるところであるから、外洋で夷船と戦うというような無謀な考えを捨てて、夷船を内河に引入れ、その進退の自由に制約を加え、上陸した敵に対しては兵砲をもって攻撃し、河中の船に対しては水雷をもって攻撃するというような戦法を展開している。これはアヘン戦争の経験に基づく議論である。鉄をもって船体を覆っており、また速度においても大砲の装備においてもはるかに勝る夷船に対しては外洋戦法では勝敗の帰趨はおのずから明らかであり、海口その他の沿岸の要地に据えられた砲台からする砲撃も、弾丸が火薬庫や船に命中する以外は無効であり、防禦の成功例は敵船を内河に引入れ、上陸した敵軍に対して土地の状況をよく知った現地の陸軍がゲリラ戦をやりに、河中の船に対しては水雷攻撃でこれに当たったというケースに限られたのである。

大陸国家で要衝が海から遠く隔たった中国の場合はこれでよかつたかも知れない。しかし海洋国家で島国である日本では通じない議

論である。象山は天保十三年の「海防八策」で、「其三 西洋の製に倣ひ堅固の大船を作り江戸御廻米に難破船無之様仕度候事」「其五 洋製に倣ひ戦艦を造り、専ら水軍の駆引を習はせ申度候」(『象山全集』巻二、三五頁)と、魏源とはまったく異なる積極的な海軍建設をなし、外洋において戦うプランを示している。そしてこれは必ずしも象山の独創ではなく、彼に先んじて会沢正志斎が文政八年(二八二五)に『新論』で、古賀侗庵が『海防臆測』(天保九年成稿、幕末には写本によって伝えられ、刊行されたのは明治十三年)の中ですでに論じている議論でもある。⁽¹³⁾

象山の特徴は第二の銃砲説の方によりよく出ている。彼は言う、「海防の要は礮と艦とにありて、礮は最も首に居れり。魏氏の海国図識(志)の中に、銃礮の説を輯めたるは、類ね粗漏無稽にして、兒童戲嬉の為のごとし。おほよそ事は自からこれをなさずして、能くその要領を得るものはこれなし。魏の才識をもってしても、しかもこれをこれ察せざりき。今の世に当りて、身に礮字なく、この謬妄を貽し、反って後世を誤りしは、吾、魏のために深くこれを惜しむ」(同上、「省僞録」一三頁)

魏源は『聖武記』の中で「彼の長技を禦ぐ、此れ古より以て夷を攻むるの上策なり」と言っているながら「礮を造るは砲を購ふに如かず、舟を造るは舟を購ふに如かず」(いずれも巻十四の「軍政篇」中に出る)と不徹底な洋務策を述べている。わが国でも『海国図志』の

翻刻者の一人塩谷宕陰はこの言の口模倣くまねがわをして、象山の海防論の直弟子吉田松陰に批判（14）されている。

ところで魏源の銃砲論は『海国図志』の六十巻本の「巻五十五」（百巻本の巻八十六）に載せられているが、それは西洋最新の銃砲製造の技術を伝えたものではなく、龔振麟（浙江）、丁洪辰（福建）、林則徐らの著を収録したもので、みづからヨーロッパ最新の技術に基づいて銃砲した経験をもつ象山からすれば物足りなく思われたのはやむを得ない。

象山が魏源に先んじていたものは、敵の長を学んでそれを自分の長とするヘロデ主義者の側面であった。象山は銃砲操練の技術を江川垣庵に学ぶとともに、それだけで満足せず、みづからオランダ語を学び、オランダ語を通じて西洋最新の科学技術を知り、それによって銃砲の製造技術を覚え、それを親試実験の精神に基づいて実地に試し、試行錯誤を重ねながらついに成功している。

魏源になくて象山にあったものは何か。その第一は、魏源が西洋から砲や船艦を求めることには熱意を示し（聖武記）、『海国図志』では広東に造船廠や火器局を置いて、アメリカ、フランスの二国から指導者や専門の技術者たちを呼んで、広東地方で船や火器の製造を始める等の提案（「籌海篇」へ議戦）をなすに至ったが、みづからそれらをつくることには熱意を示さなかった（前述）のに対して、象山はみづからつくろうとしたこと、第二は、魏源が西洋の原語を

学ぶ意志をもたなかったのに、象山は儒者として江戸で一家をなしていた三十二歳に、新しくオランダ語を学んでそれをマスターしていることである。かくして彼は、オランダ語の著作から得た知識によってみづから鉄砲をつくることに成功した。

これらの差異は、アヘン戦争時の両者の年齢差（天保十三年当時、象山は三十二歳、魏源は四十九歳であった）もあるけれども、中国の士大夫としての魏源と、日本の下級武士としての象山との意識の差ということがあったことも認めざるを得ない。六芸の中に「射・御（乗馬）」という軍事技術や「数（学）」をも含めた中国も、六朝以来、士大夫は完全に文人となつて、技術や数学への関心を失い、また技術者や語学者に対する社会的偏見を免れなかった。武士象山はそれらへの偏見をもたず、儒学や武芸のほか幼児の頃から和算ではあったが数学を学んでいた。そして儒学を学ぶ時、すでに中国語を僧活文から学んでいた。外国語を学ぶことへの抵抗感は少かつたであろう。オランダ語を学び始め、それを通じて西洋の学芸を学んで以後、「詳証術（数学）は万学の基礎なり」という認識をもつに至っている。象山のヘロデ主義者としての徹底はそうしたことに基づいている。

その反面、象山が変法論者としての魏源に対してほとんど関心を示さなかったことも閑却できない。象山は幕藩体制に全面的に満足しきっていたわけではないが、横井小楠の献言を容れてなされた文

久の改革に対する彼の反応を見ると、彼は基本的に幕藩体制を認め、むしろそれを強化して、強い政府、強い国家の下での軍事的改革に基づく国家の独立を志向していたとみなしてよいであろう。こうした彼には、変法主義者としての魏源の相が見えなかったのも当然である。その背後には、象山の奉じた朱子学と、魏源の奉じた公羊学の影が見え隠れしている。

しかし魏源についての象山的受容が幕末日本の知的状況のすべてではなかった。この問題については稿を改めて考察したい。

注

- (1) 馮天瑜「道・咸年間の経世実学」、源了圓・末中哲夫共編『日中実学史研究』、四二二頁。
- (2) 『中国思想通史』の著者侯外廬は、魏源の思想について「最も早い『変法』と『維新』の思想」である(同著第五卷『中国早期啓蒙思想』、六三六頁)と規定するとともに、魏源の「夷」に関する思想に「師夷」と「款夷」の両面があるとし、前者は「堅甲利兵」の面、後者は「通商互市」の面であるとしている(同上、六四〇頁)。(象山が共感し、注目したのは前者の側面のみであった。
- (3) 魏源の経歴についての概括的記述は主として日原利国編『中国思想辞典』の大谷敏夫氏の「魏源」の項によっている。
- (4) 増田渉『西学東漸と中国事情』三九一四〇頁。
- (5) 従来は、『海国図志』の藍本である『四洲志』は、米国人ブリ

- ッジメン (E. Coleman Bridgman) の著わした『万国地理書』の翻訳とされており、私も『鎖国時代日本人の海外知識』に拠ってそのように書いたことがある(拙著『佐久間象山』、一五頁)が、百瀬弘氏によって明らかにされ(『海国図志小考』、『岩井博士古稀記念典籍論集』所収、一九六三)、佐々木正哉氏によって確認された(『海国図志』余談、『近代中国』十七、一九八五)ところによると、『四洲志』の原著はヒュー・マレーの『地理全書』ということであるので、これに従う。なお右のブリッジメン説は、尾佐竹猛博士が『維新前後に於ける立憲思想』(初版大正十四年)に「一八三八年(道光十八年、天保九年)米國ブリヂメンが、新嘉坡に於て著はしたる、万国地理書を、阿片戦争の大立物たる林則徐が漢訳せしめ、之に魏源が諸書を輯録し、道光二十二年『海国図志』と題し、道光二十七年増補出版した」(全集版、第一巻、一七頁)と誌したのを、その後みな踏襲したものらしい(佐々木正哉氏前掲論文)。
- (6) 小野川秀美『清末政治思想史研究』、一一頁。
 - (7) 増田渉、前掲書、一一三―一五頁、なおこの『聖武記採要』は幕府により絶版を命ぜられた。
 - (8) 大庭脩『唐船持渡書の研究』、一九五―一九六頁より引用。
 - (9) 塩谷世弘訓点『海国図志』「籌海篇」序には、嘉永六年に実際に輸入されたという情報が載せられている。小島康敬氏の「西村茂樹における国家と宗教・道徳」(源了圓・玉懸博之共編『国家と宗教』所収)には、嘉永六年八月に西村茂樹の当時の老中首座阿部正弘に奉呈した上書には『海国図志』の一節「以彼長技、禦彼長技」「以夷攻狄」の句が引用されているということであり(同書四八六頁)、西村の拠ったものが何時の舶載の本であるかは興味深い問題である。

(10) 増田渉、前掲書、四三頁。

(11) たとえば儒者古賀侗庵と渡辺崋山、高野長英らは親交があった。幕府の昌平黉はけっして洋学を拒否するものではなかった(梅澤忠夫「昌平黉朱子学と洋学」、『思想』一九八八年四月号参照)。また時期はやや遡るが、大坂の懷徳堂の儒者たちは、中井履軒やその門弟山片蟠桃に見られるように、洋学への関心をもち、天文学者麻田剛立と親交があった。

(12) “Zealots” と “Herodians” と同じくは Arnold Toynbee, “Civilization on Trial” 1948, 10, Islam, the West and Future の章 (P.184 - P.212) を参照されたい。なおこの本については、深瀬基寛訳『試練に立つ文明』(上・下)がある。

(13) この問題についての会沢正志齋の洋式の船艦・巨砲の製造の考えや、外洋で戦うという方針は『新論』「守禦篇」に展開されているし、同様の考えが古賀侗庵の『海防臆測』巻之上に披瀝されている。

(14) 増田渉、前掲書、四二頁参照。

本論文は、国際日本文化研究センターの共同研究「江戸時代の芸術における外国文化(中国を中心として)の受容と変容」の成果のひとつです。